

# 京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5369 参照



※ P5363 参照



※ P5378 参照

2020.3  
No. 748

## 目次

### [大学の動き]

- 新年名刺交換会を開催 ..... 5362
- 第1回チューリヒ大学-京都大学ジョイントワーク  
ショップを開催 ..... 5363
- 経済協力開発機構 (OECD) とインターンシップ  
協定調印式および締結記念セミナーを開催 ..... 5364
- 寄附講座, 寄附研究部門の設置, 更新 ..... 5365

### [部局の動き]

- 花山天文台 90 周年記念音楽映像祭を開催 ..... 5368
- 「アジアにおける地球環境学教育・研究に関する  
京都大学国際シンポジウム」を開催 ..... 5369
- 総合生存学館 (思修館) で第4回思修館の集いを  
開催 ..... 5371

### [寸言]

- 地方創生を目指して 久和 進 ..... 5373

### [随想]

- 原民喜も読んだ「零の発見」と影の幾何学 ..... 5374  
名誉教授 向井 茂

### [洛書]

- 河川流域の人と動植物の生活と命を守る学問 ..... 5375  
竹林 洋史

### [榮譽]

- 日本学士院学術奨励賞を受賞  
依光 英樹 理学研究科教授 ..... 5376  
倉本 尚徳 人文科学研究所准教授 ..... 5377

### [話題]

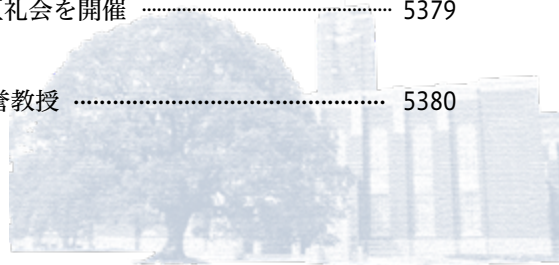
- 医学部附属病院が令和元年度災害対策訓練を実施 ..... 5378
- 宇治地区新年互礼会を開催 ..... 5379

### [訃報]

- 木村 磐根 名誉教授 ..... 5380



京都大学



大学の  
動き

## 新年名刺交換会を開催

1月7日(火)、恒例の新年名刺交換会を百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて開催しました。長尾 真 元総長、尾池和夫 元総長をはじめ、多くの名誉教授、理事・副学長、監事、部局長、教職員など約140名の参加を得て、盛大に行われました。

まず、山極壽一 総長より、子年にちなみ、「小さき命を遊ばせる」ことに触れ、新年の挨拶が行われました。山極総長は、ねずみは体は小さくても、莫大な繁殖力を持つ、インパクトが強い存在であり、そのような存在を遊ばせながら、大きなインパクトを作り、世界に広げて発信していく精神を持ちたいと述べました。

また、その例として本学の出身である吉野 彰 旭化成株式会社名誉フェローのノーベル化学賞受賞に触れ、リチウムイオン二次電池のように小さなものが、今後、再生可能エネルギーとともに地球環境の保全に大いなる力を発揮し、世界を変えていくことに期待していると話しました。

最後に、本学が2022年に125周年を迎えるにあたり、「京大力、新輝点。」というスローガンを策定したことに触れ、「輝点」には、起こす点の「起点」、機転を利かすの「機転」という意味が含まれており、点という小さなものを遊ばせながら輝かせ、結びつけて大きな力とし、世界に発信していくという京都大学の精神を表しているとの所感を述べました。

引き続き、長尾元総長の発声により乾杯し、会場内に歓談の輪が広がりました。



新年の挨拶をする山極総長



名刺交換会の様子



乾杯の発声をする長尾元総長



会場の様子

(総務部(総務課))

[目次に戻る](#)

大学の  
動き

## 第1回チューリヒ大学-京都大学ジョイントワークショップを開催

第1回チューリヒ大学-京都大学ジョイントワークショップを、11月27日(水)～28日(木)にチューリヒ大学で開催しました。本ワークショップは、2013年(第1回)、2016年(第2回)に開催されたスイス-京都シンポジウムを契機にさらなる連携強化のために企画されたもので、第1回となる今回は医学分野を中心に開催されました。チューリヒ大学より Christian Schwarzenegger 副学長, Beatrice Beck Schimmer 副学長ら37名, 本学から 湊 長博 プロボスト 理事・副学長をはじめ医学研究科, iPS細胞研究所(CiRA)の教員合わせて22名が参加しました。

ワークショップは2日間の日程で開催され、1日目は Schwarzenegger 副学長, Schimmer 副学長, 湊プロボスト 理事・副学長による挨拶, 各大学の紹介, 両大学の交流状況, さらに本ワークショップの趣旨説明に続き, 出席者全員がポスター発表の研究内容を90秒で説明しました。その後, 大学内のオープンスペースに設置されたポスター展示会場にて, 「脳」, 「がん」, 「心臓」, 「プラットフォーム・革新的技術・データ解析」, 「腎臓」の分野別に展示されたポスターを前に研究者同士で, 同じ分野内はもちろん他分野についても活発な情報交換(Matchmaking session)が行われました。研究者たちは共同研究の可能性を見つけ, 用意された複数のスペースにおいて, 個別にさらなる議論が行われました。



湊 プロボスト 理事・副学長による開会の挨拶



Matchmaking sessionの様子①



Matchmaking sessionの様子②



左から, 武藤 学 医学研究科教授, Maries van den Broek チューリヒ大学医学部副学部長, 高橋教授, 湊プロボスト 理事・副学長, Schimmer 副学長, Schwarzenegger 副学長



集合写真

大学の  
動き

2日目は、前日の情報交換、共同研究の創発に向けた議論による成果が発表されました。藤田祥彦 iPS細胞研究所助教がチューリヒ大学再生医学研究所 (IREM) と、大塚篤司 医学研究科特定准教授 (皮膚科学) がチューリヒ大学皮膚科の教授と、高橋良輔 医学研究科教授 (臨床神経学) がチューリヒ大学神経科の教授と組み、さらに柳田素子医学研究科教授 (腎臓内科学) が腎臓分野において2件、計5件の共同研究の可能性を発表しました。

2020年度以降に、第2回ワークショップが京都大学で実施予定であり、教育・研究における両大学の連携がさらに進むことが期待されます。

(企画・情報部 (国際交流課))

[目次に戻る](#)

## 経済協力開発機構 (OECD) とインターンシップ協定調印式および締結記念セミナーを開催

本学と経済協力開発機構 (OECD) はインターンシップ協定を締結し、締結記念セミナーを11月29日 (金) に共同で開催しました。

本協定は、本学の学生に OECD でインターンとして働き、高度な政策立案や調査に触れ、国際的な環境で分析能力を向上させる機会を提供することを目的としています。本協定の締結により本学の学生は、通常の直接申請だけではなく、パートナー大学として別途設けられる枠での申請も可能となります。これまで、2013年に同様の協定を部局レベルで締結した総合生存学館が OECD に学生を派遣してきましたが、今後はその機会が本学全体に広がることとなります。本協定は5年間有効で、その後も更新される可能性があります。



Touchette 執行局長と川添理事・副学長

調印式には、OECDからはJosée Touchette 執行局長、宮迫 純 タレントマネジメント・分析課長、Sam Holland 人事部政策分析官、Artur Olszewski 租税局政策分析官が、本学からは川添信介 理事・副学長、河野泰之 副学長・国際戦略本部長、寶 馨 総合生存学館長、金 広文 経営管理大学院准教授らが出席しました。



調印式出席者の集合写真

大学の  
動き

その後、総合生存学館で、Touchette 執行局長を講演者とする締結記念セミナー「持続可能な社会に向けた OECD のアプローチ」を開催しました。Touchette 執行局長は本セミナーで、OECD 加盟国による SDGs 達成のための OECD 支援や、OECD 自身による取り組みを紹介し、「SDGs 達成の実現には、国レベルだけでなく、組織や個人レベルでのアクションも必要となる」ことを述べられました。本セミナーには約 50 名が参加し、河合江理子 総合生存学館教授の司会のもと、活発な質疑応答を経て盛会のうちに終了しました。

【関連リンク】

- ・ OECD ホームページ  
<https://www.oecd.org/>
- ・ 総合生存学館 > ニュース > レポート 2019 年度武者修行 (2) OECD  
<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2019/12/03/20191202>
- ・ 京都大学 > イベント > 国際交流 > OECD - 京都大学インターンシップ協定締結記念セミナー「持続可能な社会に向けた OECD のアプローチ」  
[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/international/events\\_news/office/kikaku-joho/kokusai-kikaku/event/2019/191129\\_1430.html](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/international/events_news/office/kikaku-joho/kokusai-kikaku/event/2019/191129_1430.html)



セミナー会場の様子



講演する Touchette 執行局長  
(企画・情報部 (国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)

## 寄附講座，寄附研究部門の設置，更新

ワイルドライフサイエンス (名古屋鉄道) 研究部門 (更新)	
1. 部局名	霊長類研究所
2. 名称 (英名)	ワイルドライフサイエンス (名古屋鉄道) 研究部門 (Department of Wildlife Science (Nagoya Railroad Co., Ltd.))
3. 寄附者	名古屋鉄道株式会社
4. 寄附金額	新規受入なし
5. 設置期間	令和元年 7 月 1 日 ~ 令和 6 年 6 月 30 日 (平成 26 年 7 月 1 日設置)

大学の  
動き

6. 担当教員	寄附研究部門教員（准教授相当） 中村 美穂 寄附研究部門教員 （選考中）
7. 設置目的	京都大学の基本理念が定めた「地球社会の調和ある共存」を目指すという指針のもと、霊長類をはじめとする野生動物に関する教育研究を行い、地球社会の調和ある共存に貢献することを研究目的とする。
8. 活動内容	(1) 絶滅が危惧される霊長類をはじめとする野生動物を対象とした研究・教育・実践を通じて、その自然の生息地でのくらしを守り、飼育下での福祉をはかるとともに、人間の本性についての理解を深める。 (2) フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を統合してワイルドライフサイエンスと呼べる新たな学問領域を創生し、人間とそれ以外の生命の共生のための国際的研究と国際連携を推進する。 (3) 博物館や動物園や水族館等との協力により、実感を基盤とした環境教育を通じて、人間を含めた自然のあり方についての深い理解を次世代に伝える。

糸状菌・環境インターフェイス工学講座（設置）

1. 部局名	農学研究科
2. 名称 （英名）	糸状菌・環境インターフェイス工学講座 (Laboratory of Interface Technology between Filamentous Fungi and Environment)
3. 寄附者	公益財団法人発酵研究所
4. 寄附金額	総額 250,000,000 円
5. 設置期間	令和元年 10 月 1 日 ～ 令和 7 年 3 月 31 日
6. 担当教員	寄附講座教員（特定准教授） 吉見 啓 寄附講座教員（特定助教） 河内 護之
7. 設置目的	多様な糸状菌類の固体基質認識ならびに侵襲メカニズム解明を基盤とする糸状菌・環境インターフェイス工学の創生とその研究教育拠点の形成を目的とする。
8. 活動内容	(1) 糸状菌の固体基質への接着・定着機構の物理化学的解析 (2) 糸状菌の基質認識・分解機構の解析と共通性、多様性の抽出 (3) 糸状菌表層構造解析から展開する物質生産制御と新奇素材の探索

プルートラス・コンサルティング寄附講座（設置）

1. 部局名	経営管理研究部
2. 名称 （英名）	プルートラス・コンサルティング寄附講座－バリエーションとファイナンス シャル・ソリューション (PLUTUS CONSULTING ENDOWMENT)
3. 寄附者	株式会社プルートラス・コンサルティング
4. 寄附金額	総額 28,000,000 円
5. 設置期間	令和元年 8 月 1 日 ～ 令和 5 年 3 月 31 日

大学の  
動き

6. 担当教員	<table border="0"> <tr> <td>特命教授</td> <td>野口 真人</td> </tr> <tr> <td>寄附講座教員（客員教授）</td> <td>山田 昌史</td> </tr> <tr> <td>寄附講座教員（客員准教授）</td> <td>朝岡 大輔</td> </tr> <tr> <td>教授</td> <td>砂川 伸幸</td> </tr> </table>	特命教授	野口 真人	寄附講座教員（客員教授）	山田 昌史	寄附講座教員（客員准教授）	朝岡 大輔	教授	砂川 伸幸
特命教授	野口 真人								
寄附講座教員（客員教授）	山田 昌史								
寄附講座教員（客員准教授）	朝岡 大輔								
教授	砂川 伸幸								
7. 設置目的	<p>現代のビジネスにおいて重要なリテラシーとなったバリュエーション（企業価値評価、株式価値評価）と財務モデルに関する研究と教育を産学連携として行うため。</p>								
8. 活動内容	<p>バリュエーションに関する専門教育カリキュラムを提供し、経営管理教育部の学生や社会人に対して、バリュエーションに関する教育を実施する。また、京都大学東京オフィスにおいて、社会人を対象とした企業価値評価の研究会や講座を開くことも計画している。社会人向けの講座は、2018年度に京大オリジナル社との共同で実施済みであり、それを継続、拡大していく。</p>								

(研究推進部 (研究推進課))

[目次に戻る ↗](#)



## 花山天文台 90 周年記念音楽映像祭を開催

11月24日(日)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにて、花山天文台90周年記念音楽映像祭を開催しました。

第一部では、喜多郎さん、岡野弘幹さん、祝丸さんによるミニコンサートと、「古事記と宇宙」の上映に合わせた喜多郎さん、鹿嶋 静さんのライブ演奏が行われました。

第二部では、講演予定だった松本零土さんは、急病により残念ながらご欠席でしたが、お送りいただいたメッセージを披

露した後、大野照文 三重県立博物館館長のコーディネートのもと、喜多郎さん、岡野さん、柴田一成 京都大学理学研究科教授、磯部洋明 京都市立芸術大学准教授によるトークセッションが行われました。トークセッション中には、松本さんの映画「1000年女王」のテーマ曲「星空のエンジェル・クイーン」(作曲:喜多郎さん、楽器:喜多郎さん、鹿嶋さん、歌:高橋洋子さん)のサプライズ演奏がありました。

最後に、一本 潔 理学研究科附属天文台長から花山天文台を引き続き応援していただきたい旨の挨拶があり、終演となりました。

参加者は約400名、アンケートでは、「喜多郎さんの演奏、映像、感動しました!」、「松本さんのご病気は本当に残念でしたが、それを補って余りある内容に大満足しました。高橋さんの



「古事記と宇宙」ライブ演奏



喜多郎さん・岡野さん・祝丸さんによるミニコンサート



トークセッションの様子



部局の  
動き

あんな贅沢な形でのご登場には本当に驚きました」,「先生方,皆さんのトークもとても面白かったです。私もアメリカの大地で満天の星空を体験してみたくなりました」,「『古事記と宇宙』音から感じる視覚,この宇宙映像にピッタリでした!」,「来年も楽しみにしています」といった感想が寄せられました。



終わりの挨拶

(大学院理学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

## 「アジアにおける地球環境学教育・研究に関する京都大学国際シンポジウム」を開催

芝蘭会館において,11月26日(火)~11月28日(木),アジアにおける地球環境学の教育・研究に関する京都大学国際シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは,概算要求機能強化経費「海外サテライト形成によるASEAN横断型環境・社会イノベーション創出事業」との連携のもと実施されています。17ヵ国52組織(32大学,20企業他)からの研究者や学生,環境関連企業など,合計269名(大学244名,企業他25名)が参加しました。

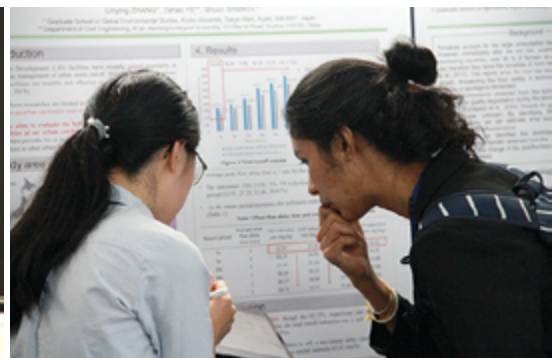


熱心に発表に聞き入る聴衆

初日は,午前中に全体セッションが開催されました。山極壽一 総長から開会の辞,舟川晋



パネルディスカッションにてコメントする  
北野理事・副学長



ポスター発表での活発な討議

部局の  
動き

也 地球環境学堂長による歓迎の挨拶の後、安達 一 国際協力機構 (JICA) 社会基盤・平和構築部長および木村知之 アジア開発銀行 (ADB) 戦略政策・パートナーシップ局長による基調講演が行われました。続いて、勝見 武 地球環境学堂副学堂長の座長のもと、基調講演者2名に Le Van An フェ農林大学長、北野正雄 理事・副学長を加えたパネルディスカッションを行い、活発な討議が行われました。

午後には、若手研究者および大学院生らによる43件の口頭発表と、それに続く73件のポスター発表が行われました。その後、特別セッションとして京都大学 On-site Laboratory プロジェクトに関する特別セッションが開催され、河野泰之 副学長によるプロジェクト全体に関する発表に続き、7件の On-site Laboratory がその進捗を発表しました。同日夕方には、吉田食堂でレセプションが開催され、参加した大学にお礼の記念品贈呈、優秀ポスター発表者への表彰などが行われました。

2日目は、午前に「SDGs 達成のための食糧-環境問題への挑戦」と「中国深圳の京都大学オンサイトラボラトリーでの共同研究活動現況と将来」、午後に「国際的高度教育システムのためのフロントライン活動」と「シーズ基金事業：若手研究者との協働のための将来計画」のそれぞれ2件のセッションが並行して行われました。閉会セッションでは各セッションの報告が行われるとともに、今回のシンポジウムの成果および今後の一層の連携に向けた各大学からの意見が述べられ、藤井滋穂 地球環境学堂教授の挨拶により閉会しました。



懇親会でスピーチをする山極総長

最終日には、京都南部クリーンセンター、琵琶湖洗堰・アクア琵琶、および琵琶湖博物館へのスタディツアーを実施し、3日間のシンポジウムは終了しました。



シンポジウムでの集合写真

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

部局の  
動き

総合生存学館（思修館）で第4回思修館の集いを開催

総合生存学館（思修館）は、1月20日（月）に「第4回思修館の集い」を東一条館にて開催しました。この集いは、本学館の応援団として支援していただいている方々を招待し、本学館の活動を報告するとともに、学生の活躍を披露し交流する機会となっています。当日は、学外から、思修館基金へご寄附いただいた方々、「熟議」科目を担当している講師の方々、稲葉カ



實学館長による活動報告

ヨ 理事・副学長、北野正雄 理事・副学長、旧教職員、本学館教職員・学生など合わせて約70名の参加があり、歓談の輪が広がりました。

第一部の「活動報告」は、山敷庸亮 総合生存学館副学館長を司会として行われました。まず、實 馨 総合生存学館長が開会挨拶および活動報告を行い、学位授与者の動向や今年度の新入生、国際教育セミナー、複合型研究会等について報告しました。続いて、各学年を代表して4名の学生（総合生存学館1年生・ドロズキナ・アリーナさん、2年生・呂 文若さん、3年生・山本 駿さん、5年生・田中勇伍さん）が、カリキュラムに基づく活動や研究内容、進路についての発表を行いました。1年生から5年生までの発表は、本学館においてどのように学生が育つ



神成教授



山崎前事務所長



實学館長



【左から】ドロズキナさん、呂さん、山本さん、田中さん

部局の  
動き

ていくのがよくわかるものとなりました。その後、神成文彦 慶應義塾大学工学部教授と山崎節子 前国際連合開発計画（UNDP）カンボジア事務所長から講評がありました。

第二部の「懇談会」は、望月晴文 東京中小企業投資育

成株式会社代表取締役社長の発声による乾杯で始まり、終了予定時刻を過ぎても歓談が続きました。最後に、北野理事・副学長による閉会挨拶で閉会となりました。

（大学院総合生存学館（思修館））



望月代表取締役社長

北野理事・副学長

[目次に戻る ↗](#)

## 地方創生を目指して

久和 進



私は50年近く前に京大を卒業し、富山の電力会社に入社し、以来ずっと富山に住んでいます。ご存知のように、少子化で日本の人口は既に減少しつつあり、地方では人口減少と高齢化が進んでいます。その一方で、東京圏だけが若者の流入により、今も人口が増加し東京一極集中が続いています。

大都市に人口が集中することは、集積による効率性の向上などの経済的メリットがあり、一定の合理性があると言われていています。しかし、全国の人口が減少する中で、東京圏の人口が3割を占め、現在も人口が増加し続けています。流入人口を男女別にみると、男性より女性の流入が多い状況です。合計特殊出生率が全国最低の東京に若い女性が集まることは、人口減少に拍車をかけることとなります。最近SDGsということが盛んに言われていますが、このまま東京一極集中が継続すると、地域間の格差が拡大し出生率が低迷し、持続可能な社会を維持することも困難になると大変危惧しています。東京への人口集中は、明治以来続いてきた大きな流れです。この流れを止め、更に逆転させることは、生易しいことではありませんが、今こそ東京一極集中を打破し、地方創生を実現しなければならないと思っています。政府においても、地方創生を大きな政策課題として取り組んでいただいています。

以前は、豊かで華やかな東京に憧れる意識が国民の中に広くあったように思います。しかし、今では、新幹線や飛行機などの交通手段の進歩や、パソコン、スマホ、ブロードバンドなど情報通信技術の普及拡大などにより、地方のハンディキャップは薄らいできています。地方には美しい自然が豊富にあり、食べ物もおいしく、真に人間らしい暮らしができます。一方、東京圏での子育ての難しさや今後進む急速な高齢化、首都直下地震などの問題がクローズアップされてきています。そのため、人々の意識も徐々にではありますが、変化してきているように感じています。地方に移住や二地域居住する人も、少しずつ増えてきています。地方にサテライト・オフィスを設ける企業も現れてきています。

北陸を含め地方にも、世界と競争してクリエイティブな仕事をしている優れた企業がたくさんあります。「東京ではなく地方でこそ、良い環境で独創的・創造的な仕事ができる。」とおっしゃる研究者もいます。最近では、東京の大企業よりも地方発の企業に、高い成長を達成している例が多いとも言われています。そのような地方の企業に目を向け、優秀な人材が地方にも集まることを心から希望するものです。地方には東京のような華やかさはないかもしれませんが、自然環境が良く、子育て・育児に適し、人間らしい生活ができるのが魅力です。幸い、北陸は豊かさの点でも大都市に引けを取りません。是非、京大の学生のような優秀な学生が、地方の良さに目を向けてくれることを期待しています。

(きゅうわ すすむ、北陸電力株式会社代表取締役会長、昭和47年工学部卒)

[目次に戻る ↗](#)

## 随想

原民喜も読んだ  
「零の発見」と影の幾何学

名誉教授 向井 茂



今年のセンター試験の国語で原民喜の「翳」が使われて話題になっていた。原爆四十時間余り前までを描いた「壊滅の序曲」という同じ頃の作品に、数学が二度ほどでてくるので、紹介する。

前年に妻を亡くした主人公は郷里の広島に疎開している。そして、ある昼過ぎ、「ひとり岩波新書の『零の発見』を読み耽っていた。ナポレオン戦役の時、ロシア軍の捕虜になったフランスの一士官が、憂悶のあまり数学の研究に没頭していたという話は、妙に彼の心に触れるものがあった。」

この士官はポンスレという数学者で工芸学校 (École Polytechnique) 出身。モンジュに画法幾何を学んだ。デザルグやパスカルが用いた射影に興味をもち、この操作で不変な図形の性質を研究した。ロシアの獄舎での成果を本にまとめ、射影幾何学の創始者となった。

昔からの幾何学、あるいは、当時発見されつつあった非ユークリッド幾何においても、長さや角度を重視する。しかし、円や正方形の影が楕円や歪んだ四角形になるように、計量的性質は射影で変化してしまう。変化しない性質などあるのだろうか?それだけで面白いことができるのだろうか?と最初は疑ってしまうが、実は可能で、私の専門とも関わりが深い。さらに、ポンスレはこの研究の中で射影空間の双対性原理を発見するが、これは幾何学における革命を導いた。「非Euclid幾何学の発見によりて改革されたる空間に関する観念は再び大変革を蒙り、さらに新空間たる射影空間が当時の幾何学者の脳裏に浮べり。ここに空間に関する観念の発達史上特筆すべきことは、当時まで空間の元素は点にして、他の凡ての幾何学的対象物は点より構成されたる図形なりとの信念が、一朝にして覆さるること」なった。(河口商次『微分幾何学』)

その後、空間概念は多様体に発展する。そして、時空という4次元多様体と重力の対が微分方程式に基づいて変化するというアインシュタイン的な宇宙観に應用される。あるいは、楕円曲線という特別な射影的代数多様体がフェルマー予想の解決に使われたりする。このような、自由化、多様化という空間概念の進化において、射影空間の果たした役割は大きい。「零の発見という画期的な事業を成し遂げた無名のインド人は、その発見がこんにちのように、全世界に恩沢を与える日があろうことを夢にも考えたことがあろうか。」と新書は結論するが、これはポンスレの時代の幾何学者達にも当てはまるだろう。

作品に戻ると、主人公のもとに東京の友から久しぶりの便りが届く。「これまで何度空襲警報に遭ったか知らない。今も海岸の方が赤々と燃えている。警報が出るたびに俺は原稿を抱えて壕に潜り込むこの頃。俺は高等数学の研究をしているのだ。数学は美しい。」(原文カタカナ)

獄舎でなく空襲もない、平和で豊かな時代に研究ができることを感謝しつつ、個人的には、75年前の八月を防府の海軍通信学校で迎えた父を偲んで筆をおきたい。

(むかい しげる, 平成 31 年退職, 元数理解析研究所教授, 専門は代数幾何学)

[目次に戻る ↗](#)

## 洛書

河川流域の人と動植物の  
生活と命を守る学問

竹林 洋史



河川や溪流の整備技術を研究する学問分野に「河川工学」と「砂防学」がある。「河川工学」は主として工学部の土木・環境系、「砂防学」は農学部の林学系で学ぶことができる学問である。私の所属している研究室は、防災研究所の「流砂災害研究領域」という研究室であり、工学研究科社会基盤工学専攻の協力講座としては「砂防工学分野」である。工学系で砂防を研究している非常に珍しい研究室であり、現地観測や屋内水路での実験などとともに、河川流域での土砂の流れ（流砂）や河川流による地形変動などを力学的に評価し、それらの結果をもとに河川や溪流の様々な整備技術を開発している。具体的には、土石流の数値シミュレーション技術の開発やその結果を用いた避難方法や土砂流出コントロール方法の提案、流砂量を予測する数理モデルの開発、河道内の動植物の生息場の保存・創生方法の提案などを行っている。

2019年は台風19号による豪雨災害、2018年は西日本豪雨災害、2017年は九州北部豪雨災害が発生した。日本は、豪雨に起因した水害・土砂災害が非常に多い国である。世界の平均年間降水量が880mmであるのに対して、日本の平均年間降水量はその二倍近くの1718mmである。日本の平野の多くは、洪水時に河川が氾濫するときに水とともに土砂が氾濫して堆積することによって形成されたものであり、積極的に治水事業を実施しなければ、我々の生活の場の多くは毎年のように洪水や土砂の氾濫被害を受けることになる。そのため、日本では「河川工学」や「砂防学」に関して非常に多くの研究が行われており、日本の河川・溪流の整備技術は世界最先端の技術となっている。日本では、国土交通省が管理する109の一級水系の河川をはじめ、地方自治体が管理する多くの河川・溪流に対して河川・砂防整備計画が存在するが、これほど多くの河川・溪流に整備計画が存在する国は世界の中で日本ぐらいである。「砂防」ということばについても、「津波」が海外でも「Tsunami」で通じるのと同様に、「Sabo」で海外でも通じる程、日本の砂防技術は海外で利用されている。

私は正直なところ、大学で研究を始めるまで、川には全く興味が無かった。しかし、河川・溪流について研究を始めると、これが非常に面白かった。「河川工学」や「砂防学」は、河川流域の人と動植物の生活と命を守る非常に大切な学問である。飲料水や生活・農業用水、食料資源を供給してくれる河川・溪流は人類にとって不可欠な存在である。一方、豪雨によって河川・溪流から水や土砂が氾濫すれば、我々の生命や生活基盤が失われることもある。また、河川流域内には多くの動植物が生息している。河川流域内の生態システムが大きく破壊されると様々な問題が発生する。これだけ強く人間社会や自然環境と関わりのある河川や溪流を、流域内の人や動植物にとって有益・無害なものにするために、智慧を出し合う学問分野を研究することに非常に充実感を感じている。

(たけばやし ひろし, 防災研究所准教授, 専門は砂防工学)

[目次に戻る ↗](#)

## 栄誉

## 日本学士院学術奨励賞を受賞

この度、依光英樹 理学研究科教授および倉本尚徳 人文科学研究所准教授が、第16回（令和元年度）日本学士院学術奨励賞に1月14日（火）選出されました。同賞は、優れた研究成果をあげ、今後の活躍が特に期待される若手研究者に対して与えられるもので、日本学術振興会賞を受賞した研究者の中から6名以内が選ばれるものです。授賞式は2月18日（火）に日本学士院で行われました。

以下に、両氏の略歴、業績を紹介します。

## 依光 英樹 理学研究科教授

依光教授は、平成9年京都大学工学部を卒業、平成14年同大学大学院工学研究科博士後期課程を修了し、博士（工学）の学位を授与されました。東京大学大学院理学系研究科博士研究員を経て、平成15年に京都大学大学院工学研究科助手に採用され、平成20年に同准教授、平成21年に同大学大学院理学研究科准教授を経て、平成27年同教授へ昇任となり、現在に至ります。

今回の受賞題目は、「非芳香族化を活用した新規有機合成反応の創出」です。

身の回りの人工的な有機分子は全て有機合成反応によって製造されており、有機合成反応は豊かな現代社会を支える原動力です。依光教授は、新規有機合成反応の開発において、縦横に有機金属化合物、遷移金属触媒、高反応性化学種を駆使し、様々な業績を上げてきました。特に最近の芳香環メタモルフォシスの研究は、あたかもコロンブスの卵のように“本来優れた安定性に特徴づけられる芳香環を切断し、別の環骨格へ作り変える”という概念的転換に基づくものです。また、芳香族性の喪失を含む過程を巧みに利用し、従来の遷移金属触媒を用いるクロスカップリング反応などとは根本原理を異にする芳香環連結法を開発した点も、概念の革新性が特筆されます。こうした分子変換の考え方は、その指導原理の新規性、明瞭性に加え、金属を用いないという意味での環境関連の優位性などから、国内外への波及効果が大きく、関連研究が盛んになり、依光教授はその先鞭をつけた若き旗手と言うべき存在となっています。その研究姿勢は一貫して新概念、新潮流の創出への意欲が横溢しており、今回の受賞となりました。



（大学院理学研究科）

[目次に戻る](#)



## 栄誉

## 倉本 尚徳 人文科学研究所准教授

倉本准教授は、平成10年東京大学文学部を卒業し、平成23年東京大学大学院人文社会系研究科にて課程博士（文学）を取得しました。その後、龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員、ドイツハイデルベルク学術アカデミー短期研究員、台湾中央研究院歴史言語研究所助研究員を経て、平成31年京都大学人文科学研究所准教授に採用され、現在に至ります。

今回の受賞は、石窟寺院や石碑、仏像等に刻まれた銘文を網羅的に調査することによって新しい知見を得、中国北朝隋唐仏教史の定説を大きく刷新する見解を導出した研究成果が評価されたものです。

倉本准教授の全700頁余の単著『北朝仏教造像銘研究』（法蔵館、2016年）を含む研究成果は、5世紀から9世紀（北魏から唐代）の中国仏教思想の歴史を、伝記文献資料のみならず膨大な件数の新出土石刻資料を遍く渉猟し、使用語句の解説・分析を通じて仏教信仰の多様性と独自性を包括的かつ普遍的にとらえた画期的な研究です。

倉本准教授は、「義邑（ぎゆう）」「邑義（ゆうぎ）」「社邑（しゃゆう）」と呼ばれた造像に関係した人々と宗教結社を時代別・地域別に分類し、かれらの繁雑な肩書から拮抗と融合の歴史を繰り返した仏教と道教の信仰実態を解明しました。また、石刻の銘文を正確に読み取り、刻まれた仏教経典で実践性の強い経典ほど中国撰述の経典（偽経）が多く含まれること、あるいは浄土教主の仏名の変化から阿弥陀仏信仰の普及の時期や禅師たちの活動に関する定説の修正をせまるなど、中国仏教史にかかわる新説の提示によって国際的に高い評価を得ています。

新たな手法をもって学界を牽引する倉本准教授により、今後、中国思想史・宗教史研究が大きく進展することが期待されることから、今回の受賞となりました。

（人文科学研究所）

[目次に戻る ↗](#)

## 【関連リンク】

- ・日本学士院学術奨励賞の受賞者決定について（日本学士院）

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2020/011401.html>

話題

## 医学部附属病院が令和元年度災害対策訓練を実施

医学部附属病院では、本院における災害発生時の初動対応の再確認および多数傷病者受入に必要な知識・技能の維持・向上をはかるため、1月16日(木)に災害対策訓練を実施しました。同訓練には、100名を超える多数の教職員、医療スタッフが参加しました。

平日昼間(13時30分頃)に震度6弱程度の地震が発生。本院に大きな被害はないが、多数の傷病者来院が想定されるという想定で、①災害対策本部設置・運用訓練、②トリアージエリア設置・運用訓練、③多数傷病者受入・医療救護訓練、④国立大学病院災害対応バックアップシステム訓練、⑤他病院からのDMAT隊派遣に係る受入想定訓練、⑥安否確認/登院可否報告メールの運用訓練、⑦BCPに基づく診療継続訓練、⑧原子力災害を想定した訓練を実施しました。

トリアージエリアにおいては、トリアージ本部および各トリアージエリア(一次トリアージエリア・赤エリア・黄エリア)のリーダーによる指揮の下、傷病者に対する一次トリアージ・二次トリアージの実施、災害カルテ・傷病者リストの記入、各エリアでの診察・処置及び病棟への連絡などを実施しました。

また、原子力災害を想定した訓練では、傷病者受入れから除染、治療までの一連の流れについて訓練を実施いたしました。

災害対策本部においては、災害対策本部長(宮本享医学部附属病院長)の指揮の下、各病棟等から提出される発災時報告書・チェックリストの収集・整理、院内外被災情報の収集、要解決事項・要請事項に対する対応の検討、各エリア・担当・関連部署間の連絡・調整、EMIS(広域災害医療情報システム)入力、空床の確認、医薬品の在庫確認および国立大学病院災害対応バックアップシステムの運用、安否確認/登院可否報告メールの運用訓練等を行いました。



傷病者の診察を行う赤エリアのスタッフ



原子力災害を想定した訓練



要解決事項への対応方針を検討する災害対策本部長等



各部署からの情報を確認する災害対策本部要員

話題

医学部附属病院は、京都府災害拠点病院（平成27年4月1日指定）として、今後も継続的に災害対策訓練を実施することにより、災害対応力の強化を図ってまいります。

（医学部附属病院）

[目次に戻る ↗](#)

## 宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月6日（月）、宇治おうばくプラザハイブリッドスペースで新年互礼会を開催しました。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員間の交流を深めることを目的に毎年開催しているもので、各部局の教職員に加え、事務部職員も参加して、宇治地区の一体感をより高める機会となっています。



新年の挨拶を述べる橋本所長 乾杯の音頭をとる渡邊所長

開会にあたり、宇治地区世話部局長である橋本 学 防災研究所長より新年の挨拶があり、続いて、次期宇治地区世話部局となる生存圏研究所から、渡邊隆司 研究所長の発声により乾杯し、出席者は銘々に歓談しました。互礼会は、新年を迎えた実感と賑やかな雰囲気の中で、盛会のうちに閉会となりました。



会場の様子

（宇治地区事務部）

[目次に戻る ↗](#)

## 訃報

このたび、木村馨根 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

## 木村 馨根 名誉教授

木村馨根先生は、12月3日逝去されました。享年86。

先生は、昭和30年京都大学工学部電気工学科を卒業、昭和32年同大学院工学研究科修士課程を修了、昭和35年同博士課程を単位取得退学されました。同年4月京都大学工学部助手に採用され、助教授を経て、昭和46年5月教授に就任、電気工学第二学科無線通信工学講座を担当されました。この間、昭和36年工学博士の学位を授与されました。平成8年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。

本学退官後は、平成8年4月から平成17年3月まで大阪工業大学情報科学部特任教授に就任され、情報科学部長、情報科学研究科長を務められました。また平成19年5月より平成30年11月まで財団法人（平成23年より公益財団法人）応用科学研究所理事、副理事長、代表理事を務められました。

先生は電波工学および宇宙プラズマ物理学、中でも地球磁気圏プラズマ中の電波伝搬に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に多大の貢献をされました。これらの研究成果は、183編の学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。主な著書に『現代電磁波動論』、『通信工学概論』等があります。

また、地球電磁気・地球惑星圏学会会長、電子情報通信学会評議員等の要職を歴任されました。

これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成24年11月瑞宝中綬章を受けられました。

(大学院工学研究科)



[目次に戻る ↗](#)

京大広報  
No.748

令和2年3月31日発行

発行 京都大学総務部広報課  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。

「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



京都大学は2022年に創立125周年を迎えます  
URL: <https://125th.kyoto-u.ac.jp>